

# 随想

第183回

人類は太古、狩猟生活が中心でありましたが、1万年程前に農耕を始め定住するといふ農業革命により、鉄器に代表される新しい文明を切り開きました。

そして、18世紀後半から20世紀前半にかけて産業革命を推進し、物質文明を築き上げました。

さらに、20世紀後半に出現したコンピュータに代表される高度情報社会をアルビン・トフラーが「第三の波」と呼んだのは、記憶に新しいところであり、まさに、情報革命の始まりです。

しかも、情報技術の進歩は目覚ましいものがあり、ムーアの法則（半導体の進歩は、18カ月で2倍）とかギルダーの法則（通信の進歩は、12カ月で2倍）といった事象が現実味を帯び、

コンピュータを中心とする情報通信機器の進歩は、目を見張るばかりであります。

20年程前には、数億円もしたスーパーコンピュータの機能は、現在、数十万円のパソコンで充足されるといわれますし、インターネットも、わずか十数年の間に急速に普及し一般化してまいりました。さらに、身近な携帯電話の進歩は、驚くばかりであります。



す。

アナログ方式の第一世代の携帯電話が出現して約20年、10年前には、契約数300万台程度であったものが、第二世代のデジタル方式を経て、現在は、第三世代に入りつつあり、契約数も9300万台と飛躍的に普及しつつあり、国民一人1台の時代を迎えております。

音声通信のみから、動画を

含む映像機能も備え、視・聴を満足するまでになってきております。

要するに、携帯電話は、インターネット接続、TV視聴、電子決済、ナビゲーションなどの機能付加により電話を超えた高機能情報端末となり、今や個人個人のライフラインにさえなっております。地上波テレビ放送も5年後には、デジタル化が完了する

## 「第三の波」(情報革命)に想う

—急速な社会の情報化の中で—

土岐市長

塚本保夫

予定であり、双方向性が確保されるとともに「放送と通信の融合」が、現実のものとなるであります。

そこで、今後10年の情報通信の進歩を展望いたしますと、放送局が一方的に視聴者に情報を伝達する方式から、視聴者サイドも情報発信する時代がやってまいります。

つまり、情報伝達がピラミッド型の中央集権的なものか

ら、ネット型へ変革して行くであります。

換言すれば、従来の「マスメディア」による一元的な価値感形成から、誰もが情報発信できるメディアの出現により、メディアにおける「情報の送り手と受け手の関係」が従来の送り手主導の「一対多」から、誰でも情報発信ができる「多対多」のメディア構造となり、マスメディアですら

一つのメディアに過ぎない時代となつて、「送り手主導から受け手主導の情報社会が出現する」といわれます。

そうなると、テレビ局の収入の中心である広告料などがどんどんネット系統へ流れ、新聞もネットに流れて部数が減るであります。

さらに、携帯電話もいよいよ第三世代に入り、やがて第四世代へ移行するといわれま

すが、素人の私には具体的にどうなるか判然としませんが、ものすごく便利なものになるに違いありません。究極的には、メディア構造は、マスメディアから一元的に情報が流される送り手主導の「一対多」から、多様な送り手の出現による「多対多」となり、やがて名実共に受け手主導の「多対一」になるであろうといわれます。

こうした、近未来の経済社会の情報化の中で、雅味や趣味・好み・使い勝手の良さなど、消費者の感性に訴える陶磁製食器の商品開発や販路拡大のために、情報技術の活用が重要な意味を持つ時代がやって来ると考えますがいかがでしょう。

なお、パソコンは、戯れることから始めよといわれますが、市ではセラトピア土岐2階にパソコンルームを開設しておりますのでご利用ください。